

灰かぶりの素顔と主題考

百田 弥栄子

に甦える。以下抹殺と甦えりが繰り返される。

(9) 繼娘は最終的に元の姿に甦えり、妻の座をとり戻す
(火こ火こ婆の庇護を語る類話もある)。

中国の民話灰かぶりには、大別して次の二つの型がある。

- 蛇媚入り 第II型
- 第I型
- (1) 生母がなくなり、繼母が迎えられる。
 - (2) 繼娘は繼母にこき使われ、牛（母等）の援助を受ける。
 - (3) 繼娘は繼母の課した種拾い等の難題を果し、祭り（婚礼、芝居等）に行く。
 - (4) 繼娘は資産家（王子、貴族等）の若者に見染められる、もしくは若者の提示物（靴等）に合致して婚約する。
 - (5) 繼娘は若者と結婚する（第I型のみ繼母・義妹が罰せられる類話あり）。
 - (6) 繼娘は里帰りする、もしくは義妹（繼母・義姉等）が訪問する。
 - (7) 義妹は繼娘を井（河・淵等）につき落して、繼娘に成ります。
 - (8) 繼娘は小鳥に甦える。義妹は小鳥を殺すも木（竹等）

このように、大別して(1)から(5)までを語る型と(1)から(10)までを通

して語る型とがある。前者を第I型、後者を第II型とする、これまで筆者が入手した類話は第I型が一五話⁽¹⁾、第II型が三〇話である。
第I型は『グリム童話』の「灰かぶり」にその典型を見るように、世界的に広く知られた型であり、第II型は「白い花よめと黒い花よめ」にかすかにそのモティーフをたどれる型である。

そして、中国では類話の多い第II型の方が、主要な型であると見成してよいだろう。

この第II型は、(4)の若者の提示物にぴたり合うくだりから第II型の後半部(6)～(10)にかけては、もしも若者を蛇媚に、繼娘を三女、七女もしくは妹等に代えれば、民話蛇媚入りとそつくり共有しているのが特徴である。中国の蛇媚入りは、筆者の入手している五〇余話によると、

花盗型 娘は花をみやげにと頼む。父は蛇媚の花園の花を手

折る。

援助型 父が山畑の仕事を手伝った者に娘を与えるという。

(イ) 蛇が手伝う。

強要型 蛇が父（母）に娘を妻にくれぬと食つてしまふぞと脅す。

のいずれか一つもしくは二つの発端を語る。そのうち最も多い花盗型では、蛇が姉妹のうち花を髪にさした娘を妻にする（4）のぴたり合うモティーフ（後述）という場面があり、

(ロ) 三女（七女、妹、五女、姉等）が蛇の妻になる（5）に当たる）と続き、以下（から）トは（6）から（10）と同様の展開をみて終結する。

中国において、民話灰かぶりと蛇媚入りとが密接な関係にある点については、すでに一九二九年に、周作人氏が「蛇媚には爬虫類の蛇の痕跡はなく、擬人化されているが、それはまた灰かぶりの母が文化的な変遷によって母牛から仙女になったと同じ状況である」と述べている。加えて、密接な関係を越えて、この二つの民話が一つの民話に結合している類話さえ、見出すことができる。それは漢族の「翠兒と蓮兒」⁽⁸⁾で、第Ⅱ型の灰かぶりながら、花盗型の発端と継娘が花を髪にさす場面を有し、更に夫は「蛇」なのである。

さて、第Ⅱ型に関して、(1)から(5)までの前半部（第Ⅰ型）と、(5)から(10)までの後半部に分けることができるという見解があれば、これを直ちに否定することはできないかも知れない（(1)(5)(6)(10)がそれ導入と結末のツーケとなるか）が、第Ⅰ型に蛇媚入りを続けたという見方があれば、それには従わない。第Ⅱ型の灰かぶりの語り

手が、第Ⅰ型の「シンデレラ」譚を語り終えた後に「蛇媚入り」譚を語り継いだ、というわけではあるまいからである。第Ⅱ型はあくまで(1)から(10)までを継ぎ目なしに語り通したところで、一篇の物語を構築しているのである。

しかしながら、第Ⅱ型の後半部と蛇媚入りとの著しい共有は、互いの中に語り込められた祖先の智慧・思想が同質のものであるからである点は、重要である。それはまた前半部、すなわち第Ⅰ型に祖先が語り込めたそれとも同質であるはずである。たとえ蛇媚入りの方が分布の広さ多さとモティーフの均一性とから、より古い成立であると推測できるにしても。ただし、蛇媚入りと合わせてのより有機的で興味深い考察は、別稿に譲ることにする。

二、ぴったり合う婚姻儀礼

では「民話灰かぶりに語り込めた祖先の智慧・思想」はどの場面に最も集約して示されているかを考えると、それはやはり緊張を伴なう山場の場面においてであろう。すなわち、第Ⅰ型と第Ⅱ型の前半では(4)の「靴テスト」の場面であり、第Ⅱ型の後半では(8)の魁えりの場面である。

従来、靴テストは履物崇拜を表わしているとの説があるが、筆者は中国で履物崇拜の民話をまだ一例も見出していない。それならば「ぴったり合う」という点が重要なのではないだろうか。ぴったり合つたので結婚したよ、という婚姻儀礼を語る民話なら、すでに一五〇話を越えて数えられるからである。

それは、一組の男女が山頂から同時にころがした引き臼の上下の目がぴったり合い、ふるいとみがぴったり重なり、女の持つ針の目に男が投げた糸がすっかり通り、川の両岸で同時に焚いた香の煙のがからまる、などという、主として“兄妹”婚型の洪水伝承にみられる民話である。

この点に関しては、すでに拙稿「中国のシンデレラ考」⁽¹⁰⁾で提起し、「イザナキ・イザナミ神婚神話の初形態考」⁽¹¹⁾でも補強したので、重複はさける。けれども、このような婚姻儀礼を通過して結婚する一組の男女は、男神と女神もしくは天神の意を受けた神聖なカップルであると推測できる点は、触れておきたい。

たとえば、雲南省瑤族の神話「太陽と月の成婚」⁽¹²⁾は、

昔、大洪水が襲って、人類は絶える。

太陽（兄）は月（妹）に求婚する。

天意を聞こうと引き臼をころがし、髪を梳く。

臼の目はぴったり合い、髪の毛は互いにからまつたので結婚する。

と語り、阿昌族の神話叙事詩「遮帕麻と遮米麻」⁽¹³⁾は、

チャパマ神とチャミマ女神は天地を創造する。

二神は下凡し、チャパマ神は求婚する。

天意を聞こうと引き臼を燃やす。

煙の先がからまつたので結婚する。

と唱い、彝族の神話「人類の来源」⁽¹⁴⁾は、

太古、人はいない。

天神が一男一女（兄妹）をそれぞれヒヨウタンに入れて下

(iii) 凡させ、仙人が兄妹婚を勧める。

(iv) 兄妹は天意を聞こうと引き臼をころがす。

(v) 白の目はぴったり合つたので結婚する。⁽¹⁵⁾

盤古は七日七月を天に掛けて、心根の悪い人類を絶やす。

南瓜をつくり、実った瓜から兄妹が出現する。

兄妹は引き臼、ふるいとみをころがし、川の両岸の松木と

杉木にのぼる。

白の目はぴったり合い、ふるいとみはぴったり重なり、二本の木の梢は互いにからまつたので結婚する。

と語る。このような場面は、李冗の『独異志』卷下〈叢書集成〉にも見られる。

宇宙のはじめ、女媧兄妹ふたりのみ。

兄は求婚する。

天意を聞こうと香を焚く。

煙がからまつたので結婚する。

これらの(1)(2)の項では、一組の男女が神もしくは神の子であると語っている。(1)は天意に叶う夫婦であることを証明する最も原初的な婚姻儀式であろうし、その目的は、人類の始祖たるにふさわしい

神の子を生んで子孫を繁栄させる点にある。これは、太古、最も有効なこの世への豊穣の贈物であつたろう。

灰かぶりにたち返れば、灰かぶり嬢もまた、若者の提示した物

（靴が最も多くて二〇話、他に腕輪、棉糸、指輪等）にぴったり合つたので結婚する。この“ぴったり合う”場面に込められた祖先の智

恵が、前述の(ハ)の項の場面に込められたそれと、全然別のものであらうはずはない。ぴったり合つてこそ、良き子孫（＝豊穣）に恵まれるのは眞実なのだから。そうだとしたら、灰かぶり娘もまた神聖な女神のような女性で、ぴったり合うという天意による婚姻儀礼を羞なく通過して結婚し、この世に豊穣をもたらす使命を帯びているという了解が、語り手と聞き手との間にあつたのかも知れない。

三、甦えりを用意する籠り

では、後半の山場である(8)甦えりの場面にも、『豊穣』が語り込まれていてあるから。

そこで、灰かぶり娘の甦えりに注意を向けて、たとえば前掲の漢族の「翠兒と蓮兒」と、四川省藏族の「巴爾布の三姉妹」、雲南省（？）彝族の「阿伊處と阿伊苟」、広西区壮族の「達架の物語」、新疆区錫伯族の「娘伊爾忍」を無作為に選んで、それぞれ⑧⑨⑩⑪⑫

⁽¹⁷⁾

とするべく、次のようにある。

- ④娘→小鳥→棗樹と実→敷居→紡車→芋環→娘
- ⑤娘→九音鳥→トゲのある木→燃えさし→娘
- ⑥娘→小鳥→ハサミ→娘
- ⑦娘→カラス→一叢の竹→燃えさし→娘
- ⑧娘→小鳥→火→火こ婆宅→娘

- ⑨娘→カラス→一叢の竹→燃えさし→娘
- ⑩娘→小鳥→赤い宝→火→火こ婆宅→娘
- この甦えりで納得がいくのは④の棗樹を切つて敷居を作り、更に紡車に細工する場面と、⑤と⑦の火にくべて燃え残る場面で、共に(17)で示したが、その他は常識では考えられないで……で示した。

この不思議な甦えり（変化、転生、再生）を語る場面を更に精統すると、そこに一定の秩序を捕えることができるようだ。何らかの容器（水や土も大きな入れ物と考える）に籠つて（□で示す）変化をとげて出現するという原理である。④では「灰かぶり娘が対立者に井（水）につき落されて死に、小鳥に甦えるも殺される。夫が棗樹の下に埋葬（土）すると、秋に美味の実が成る。対立者が伐り倒すと夫が敷居を作り、更に対立者がたたき伐ると夫は紡車にする。対立者がカマドで燃やすと芋環に変じ、隣り村の婆がカマドをのぞいて芋環を見つけて持ち帰る。婆の家ではそれ以来機織りの音がする。様子を伺うと、芋環から美しい娘が現れる、と語っている。

⑤娘→井→小鳥→土→棗樹と実→敷居→紡車→カマド→芋環→

火こ婆宅→娘

同様に④⑤⑥⑦も示してみると、

⑥娘→湖→九音鳥→土→トゲのある木→イロリ→燃えさし→火
 ⑦娘→小鳥→火→火こ婆宅の櫃→娘
 ⑧娘→河→小鳥→カマド→ハサミ→火→火こ婆宅の櫃→娘
 ⑨娘→淵→カラス→土→一叢の竹→火→竹筒の燃えさし→火
 ⑩娘→井→火→火こ婆宅→娘

灰かぶり娘は実・箱・櫃・竹筒等に籠るという過程を経てから甦えつていて、彼女には棒をひと振りして、ぱっと変身する器用さはなく、何らかの容器に籠るという過程（火こ火こ婆のテリトリーに入れる（□で示した））という過程も、後述）が必須であるようだ。その上、『ぴったり合う』婚姻儀礼が神々の結婚への通過儀礼で

あらうと推測されたように、この甦えりを用意する“籠り”もまた神々に課された誕生（再生等）への通過儀礼であろうと思われる。

(四) 金と銀で十二日十二月を鑄造し、のち十一日十一月を射落す。

す

兄妹は結婚する。
妹は肉球を産む。

十二 固の事に変じる。

ていた種の数だけ人類の始祖が出現している。例「遮帕麻と遮米
麻一でも、チャミマはヒヨウタノの種を生み、実つて大ヒヨウタノ

21

贵州省松桃州と湖南省湘西州²²一帯の苗族の民話「神母と狗父」と、

からこの世の最初の人類が出現する。〔人種の來源〕では、天上

（イ）神農が「穀物をもたらした者に公主を与える」と布令る。

神農が「穀物をもたらした者に公主を与える」と布令する。この申向が穀物をもたらす。

神狗が穀物をもたらす。

「**ム**」**白****密****白****ハ**、**18****葉** 雪雨名抄本の初語余事語

牛帽密帽

(本) 血球もしくは肉球から人類の祖が出現する。

(口) ヒヨウタンから兄妹が誕生する。

この数例からも、瓜・皮袋・肉球・血球等の容器に籠り、しかる後誕生するのは男神と女神の子、天神の子、天意を受けを聖なる

(二)

子であることが読みとれよう。古えには容器に籠り、籠ることを通

（付）皮袋から人類の祖が出現する
一言、吉本の「三才久又」

ように思われる。それならばその思想は、ここで見たような神婚神

(イ) 下界は妖怪が横行して乱れている。

品や渋水伍承は限定されたものである」と考える必要はない。当然

本二限室する必要すらない二言つ二万三（ハ三う）。

序に限定する必要すらないと言つた方が正しいだろ？

世紀き王子の妃は肉球を産む

誕生する、カエル息子の民話がある。年に一度の馬競べにカエル皮

貴州省黔東南州苗族の神話は、

りのしくも美しい若者となつて白馬はひち乗り、会場にか
りつけて優勝をさらう。村に侵入してきた大勢力の漢軍を打ち破る。

土司の娘に求婚して、土司の難題をやりとげる。雨水を司つて万物に恵みを与える。このようなカエル息子を、民話は“地母神の息子”⁽²³⁾ サルカール神の化身”、“天神の息子”、“雷神の息子”等と語っている。

さて、カエル皮・犬皮・卵・竹筒等に籠り、瓜・皮袋・肉球・血球等に籠つて誕生した神の子の主たる使命は、(未)に見るようにこの世に子孫を繁榮させることであり、そして豊かにさせることである。容器に籠り、甦えることのできる灰かぶり娘も、同様にこの世に大いなる豊穣をもたらそうとする天意を受けた、女神のような女性であるのかも知れない。

民話灰かぶりは、前半には“ぴったり合う”婚姻儀礼、後半には誕生への“籠り”的通過儀礼という原初の風景に遙かに通じる智慧・思想を一大柱に建て、“現代風”に肉付けをした、見事な構成の民話であると思われる。

四、あばた嬢と火こ火こ婆

ほんば

灰かぶりの第I型ではあからさまではないが、第II型の(7)(8)の場面に本性を現わす対立者がいる。幸せな結婚生活を送つて（玉のような子に恵まれて）いる灰かぶり嬢（義姉、妹等）にほのかな嫉妬心を抱くのは判るとしても、あげくに灰かぶり嬢を水死させ、自分が身代わりになるのだから、この場面は女同士の嫉妬心を表わしているなどと軽くすますわけにはいかない。

灰かぶり嬢と対立者に関して、心やさしいに對して不心得者、働く

き者に對して怠け者、美しいに對して醜い等の相対立する要素を搜すことはできる。けれども、対立者のきわだつた特徴は“あばた顔”⁽²⁴⁾ だという点である。

では、この“あばた”にも“豊穣”への指向が込められているのであろうか。

漢族の「赤い宝石」

⁽²⁴⁾

「……若者が美しい童女を妻にする。金持ちが数百人の宮女のなかを娘を連れ帰ることができなければ、妻はわしのものと言う。童女は夫に最も醜い娘を選べと耳打ちして、連れ去られる。当日、夫はあばたの娘を連れ帰ると、やはり妻だった」と語っている。

雲南省白族の民話も、

「色黒であばたの醜い娘が、皇帝の妃を選ぶという貼紙を見て応募してみたくなる。毎日井に顔を映して美しい娘となり、妃に選ばれる。実は娘は井の中の童だった」と語り、貴州省苗族の種々の金属の誕生、來歴、結婚を歌う叙事詩

⁽²⁶⁾

の一節には、

「姐剛淑はひどいあばたづら、

愛してくれる人はいない。

誰が嫁に迎えたかって？

高炉が嫁に迎えたよ」

と唱い、四川省彝族の英雄叙事詩にも、

「山の人々がおかしな病気にかかったよ、

てんで治りにくい病気、

ぽっぽつあばたが出る病気。

雷はオロチと蛇がよく効くといつて、

天へ昇つて行つた、

オロチと蛇の骨を求めたよ」

と唱う一節がある。

雲南省景頗族は五穀豊穫をもたらす四種の天神（天鬼）を祀つてゐるが、その四番目の天神は阿木といい、阿木の怒りに触れると雷が落ちて物みな裂け、人々はあばたになると信じている。

これから、あばたに竜や蛇、金属、高炉、雷との深いかかわりを認められよう。それらはまた豊穫とも繋がりがある点は、周知の通りである。仮りに灰かぶり娘が豊穫の女神もしくは豊穫を予祝する巫女だとしたら、あばた娘はその反対の非豊穫・反豊穫の女神・巫女を象徴しているのであろうか。

貴州省黔南州三都県の水族の「二人の嫁」⁽²⁹⁾は、その点を示唆してゐる民話である。

「兄嫁は色白で美しいが、怠け者。弟嫁は色黒で醜いが働き者。弟嫁は畠でモチアワを摘み、山のようすに担いで帰る途中、谷でひと休み。白髪の婆が現れてモチアワを入れ、ひと噛みして弟嫁の顔に吐きかける。家に戻つて鏡を見ると、美しく色白になつている。兄嫁は畠から大豆を小袋に摘んで来て、谷で休む。婆が大豆を噛んで顔に吐きかける。家に戻つて見ると、色黒で、そのうえあばた娘になつていて、氣を失なう」

恐らくあばた娘は豊穫に鋭く対立する者であるからこそ、むごすぎるような極刑を甘んじて受けなければならなかつたのだろう。愚け者、心根が悪いといつだけでは与えられるはずのない残酷な死を。

次に火こ火こ婆（隣りの婆）を考察すると、本来火を絶やすことは一家の女主人の恥であるはずが、民話の婆はおおらかに隣りの家に行つて、イロリやカマドをのぞき込む。

すでに前章の籠りの場面⑧⑨⑩⑪で見たように、灰かぶり娘が甦えることができるのは、土と水という大きな入れ物と火（イロリ・カマド等）の他に、箱・櫃・竹筒のような容器に籠つた結果であつた。ただ、火こ火こ婆の場合には、婆の家の箱と櫃に籠る場面もあるものの、□で示したように婆の家そのものを大きな容器と考えてはじめて、矛盾なく筋が通る。

藏族の民話「妖魔を退治した神馬」⁽³⁰⁾は、母が美しい娘に「明日一番に火を借りに来た者嫁になれ」という、娘はその言葉に従つて火を借りに来た若者と結婚する、という場面がある。『火を借りに來る者』（婆が最多）は富や幸せをもたらす者なのかも知れない。

思えば隣りの婆は、子を産む母性にとつてどれほど心強く頼もしい庇護者であろうか。婆がのぞくイロリ、カマドは産屋の火なのに違ひない。豊穫を指向していると思われる民話灰かぶりにしても、隣りの婆、火こ火こ婆は歓迎されるべき登場人物なのである。婆は夫の家にさえなかつたような強力な保護力、守護力を持つてゐると、了解されていたのである。だからこそ、灰かぶり娘（豊穫）とあばた娘（反豊穫）とのいつ果てるとも知れぬ死闘が、婆の家もしくは婆のテリトリーに入ったことによつて、急転直下、豊かな終結を迎えることができたのである。

ところで、婆が山畠を行つてゐる留守に、甦えつた灰かぶり娘はくるくると働いて家事をこなし、機を織る。こんなことが数日続く

ので、婆はある日でかけたふりをしてそっと戻り、様子を伺つてわけを知る。

この場面は、犬の皮袋やメンドリの羽毛に籠つて若者の元に来た竜女や天女の民話、カエルの皮袋や卵・瓜等に籠つて老夫婦の元に来た雷神や地母神の息子の民話等とも共有している。すなわち竜神や天神、雷神等の神々の娘息子たちは容器に籠つて下界に降り、数度の工作をして家人の驚きと期待とが最も昂まった緊張の時に、効果的に姿を現わす。そしてその家や村を富ませ、悪者を滅ぼして平和で豊かな世に直すのである。

婆の家で効果的に甦える場面を共有する灰かぶり娘もまた、彼らと同様に神の娘なのであろうし、同様に豊穣をもたらす使命を果すことが期待されているのであろう。豊穣に立ち塞がるあらゆる障碍を乗り越えて。

なお、民話灰かぶりが語る農業形態、難題等で語られる作物、少数民族が挙行する農業祭祀を思わせる幾つかのモチーフ等から、灰かぶりの最初の語り手は山地畑作（焼畑）農耕民であろうと推測した。灰かぶりの素顔と主題を追求する上で重要な点だが、紙面が尽きたので次の機会に待ちたい

（一九八六年十月三十日）

【註】

（1）①澤汪仁增整理一九六二「奴隸的女兒」『雲南各族民間故

事選』三五四—三六一頁、人民文学出版社 ②羅希吾戈整理

一九八一「嫋諾与阿朗」『山茶』第三期一三八—一四三頁 ③

唐春芳整理一九八一「歐樂与召納」『苗族民間故事選』一七四

—一八六頁、上海文藝出版社 ④阿兵整理一九八三「土參和恩瑪」『南風』第三期二四—二五頁 ⑤段成式『酉陽雜俎』續

集卷之一『支諾臯上』三二〇〇—二〇一頁、中華書局『南方

熊楠一九七一「西曆九世紀の支那書に載せたるシンドラレラ物語」『南方熊楠全集』第二卷一二九一一三一頁、平凡社） ⑥

岩溫扁・征鵬編訳一九八三「金鯉魚」「僚族民間伝説」八六一

九五頁、中國旅遊出版社 ⑦馬超英整理一九八四「川草花和馬蓮花」『民間文學』第八期一九一—二〇頁 ⑧李提甫・陳桂

蘭訳一九五七「哈結爾姑娘」『民間文學』二月号一一一六

頁 ⑨焦沙耶・張運隆等整理一九八二「兩個孤兒」「哈薩克族

民間故事」三一—三二五頁、新疆人民出版社 ⑩金德順一

九八三「孔姫和葩姫」『金德順故事集』一二一一—二五頁、

上海文芸 ⑪南永前整理一九八二「金粉和玉粉」「朝鮮民族

故事選」二一四一二—七頁、上海文芸 ⑫謝承華整理一九六

二「川草兒」『民間文學』第五期七三—七七頁 ⑬費林整理

一九八一「牛奶奶」「珍珠泉」八五一九五頁、山西人民出版

社 ⑭朱光燦訳一九八六「金龜与葉弄」『山茶』第一期七五

一七七頁 ⑮王景生訳一九八四「兄妹倆」『新疆民間文學』

第七集一五一—二〇頁等。

（2）

①李硯芳・王英搜集一九五六「翠兒和蓮兒」『民間文學』九

月号四二—四六頁 ②姚伝鑑記一九八〇「胞妹和靚妹」『民

間文学作品選』上冊一七四—一七八頁、上海文芸（林蘭編一

九三一「三個願望」北新書局より） ③平措布赤整理一九八三

「真假新娘」『西藏民間故事』一九一—一九四頁、西藏人民出

- 版社 ④肖崇素整理一九五六年「巴尔布的三姊妹」『青蛙騎手』三五—五三頁、重慶人民出版社 ⑤肖崇素整理一九八一「阿茨姑娘」『彝族民間故事選』一七二—一九三頁、上海文芸三頁 ⑥燕宝整理一九八一「阿諾楚和阿諾詎」『同⑤』一九四—二〇三頁 ⑦黃姑整理一九八四「牧牛姑娘阿依」『山茶』第二期四六—四九頁 ⑧羅鑫搜集一九八一「阿伊処和阿伊苟」『中國少數民族民間故事選』上冊一八二—一九三頁、中國民間文芸出版社 ⑨海濤整理一九八四「神奇的花鳥」『山茶』第六期三三—三七頁 ⑩白章富整理一九八四「牛丕牛尼阿媽」『哈尼族民間故事』一四三—一四九頁、雲南人民出版社 ⑪東耳・永生整理一九八二「木屯的故事」『山茶』第四期六二—六五頁 ⑫李茂先搜集一九八二「金剪子姑娘」『大理文化』三八一四—一頁 ⑬燕宝整理一九八一「谷璠谷婷」『南風』第二期四一九頁 ⑭鶴小群整理一九八四「兩姊妹」『楚風』第三期一二一一六頁 ⑮楊昌鑫整理一九八四「妹琶和妹朗」『山茶』第四期七二—七七頁 ⑯藍鴻恩整理一九八四「達架的故事」
- 〔5〕 同〔3〕 II 三八五—三九一頁
- 〔6〕 邱樹森一九八〇「西哩色勒若」『山茶』第一期(創刊号)八七—八九頁 木榮先・和青善搜集一九五七「大姐和三姐」『民間文学』十一月号一三—一九頁 往了・当胶整理一九六三—一九頁 ⑰毛德昌整理一九八四「芒果姑娘」『山茶』第四期一四六頁 ⑲岩喊英・岩吞整理一九八五「檀香樹」『傣族民間故事選』八七—九五頁、上海文芸 ⑳楊再宏整理一九八三「遂美」『侗族民間愛情故事選』二〇三—二〇八頁、廣西人民出版社 ㉑遲建成・張平等整理一九八三「蠱咗鳥」『黎族

- 民間故事選』七二—一〇一頁、上海文芸 ㉒郭澤友一九八〇「奧桃堆」『五指山伝説』九〇—一〇三頁、廣東人民出版社 ㉓趙春生整理一九八四「伊爾尕姑娘」『民間文学』第十期二六一二八頁 ㉔孟志東一九七九「寶布和莎佳」『達斡爾族民間故事選』一六四—一六九頁、上海文芸 ㉕裴永鎮一九八一「孔姬和葩姬」『民間文学』第七期二二—一八頁 ㉖袁洪銘一九二九「兩姊妹的故事」『民俗』第六四期五〇—五六頁 ㉗白章富一九八五「水牛媽媽」『民間文学』第三期四八—五一〇頁 ㉘忠錄整理一九八四「孤兒和黑牛的故事」『新疆民間文學』第九集四—一五頁 ㉙黃革整理一九八五「達稼與達倪」『廣西少數民族民間故事』二〇—二七頁、廣西民族出版社等 ㉚小澤俊夫訳一九八五「灰かぶり」『完訳グリム童話』I 一五〇—一六一頁、ぎょうせい
- 〔4〕 山室靜一九七九『世界のシンデレラ物語』三六—三八頁、新潮選書
- 〔7〕 周作人一九三一「關於菜瓜蛇的通信」『漁夫的情人』(林蘭

編、初一九二九）五一五三頁、上海出版社。ただし、筆者は、後述するように、母牛が仙女に甦えるという点が原初的な姿であるとは考えていない。

（8）同（2）の①、採集地が重要と思われる所以問い合わせたところ、文革期に資料を紛失したとの由で、知ることはできなかつた。

（9）閻敬吾一九六三『民話』一七八頁、岩波新書（初一九五五）、金闇丈夫一九七六「シンデレラの靴」『小馬と石牛』一三七

一一四二頁、角川書店等

（10）拙稿一九八一「中国のシンデレラ考」『中国研究月報』三月号一二一二七頁、中国研究所

（11）拙稿一九八五「イザナキ・イザナミ神婚神話の初形態考——『兄妹』婚とヒルコの検討——」『アジア・アフリカ語学院紀要』第五号四五一八三頁

（12）梅中泉整理一九八三「日月成婚」『山茶』第三期二〇一二三頁

（13）智克整理一九八一「遮帕麻与遮米麻」『山茶』第一期二四三一頁

（14）鄒世運整理一九八三「人類的来源」『大理文化』第二期六二一六三頁

（15）禾青整理一九八五「盤古造人」『傈僳族民間故事選』七一

一一頁、上海文芸出版社

（16）高等学校民間文学教材編寫組編『民間文学作品選』上冊五頁、上海文芸出版社

（17）それぞれ同（2）の①④⑧⑯²⁴⁾

（18）和即仁一九八〇「拉祜族的族称和人名」『民族文化』第三期三一頁

（19）王沂暖・華甲訳一九八〇「格薩尔王伝」『龍苗』第四期三三一四三頁

（20）宋兆麟一九八三「雷山苗族的招童儀式」『世界宗教研究』第三集一三九一一四〇頁

（21）燕宝整理一九八一「神母狗父」『苗族民間故事選』二〇一二三頁

（22）田兵・剛仁・蘇曉星・施培中一九八一『苗族文学史（德帰馬籌）』五七頁、貴州人民出版社 田兵氏に苗語の徳帰馬籌の意味を伺つたところ、「公主と犬」の意であるとお教えいただいた（一九八四年十月二七日、中国民話の会例会、於都立大学）。

（23）肖崇素整理一九五八「青蛙騎手」『中国民間故事選』二五四一二六七頁、人民文学 王堯編訳一九八〇「青蛙和公主」『说不出完的故事』九二一一〇〇頁、青海民族出版社 蘭鴻恩一九八三「壯族神話簡論（銅鼓的故事）」『三月三』第一期（創刊号）五五頁 楊知勇整理一九八一「青蛙和綉花姑娘」『中国少数民族文学作品選』第五分冊三三九一三四二頁、上海文芸等

（24）譚寧亮一九八四「紅宝石」『民間文学』第六期七一八頁

（25）張文勛・沈葆清一九八二「小白竈不忘彭家水」『白族民間故事』一二〇一二二三頁、雲南人民出版社

(26)

馬学良・今旦訳注一九八三「運金運銀」『苗族史詩』三九
頁、中国民間文芸出版社。『姐剛淑』も金属の一種であろう、
という注が付されている。

あつた。

(ももた・やえこ／中日文化研究所)

(27) 新克整理一九八二『支岬阿魯—大小涼山彝族神話故事』
五九頁、四川民族出版社

(28) 桑耀華一九八五「景頗族の鬼魂崇拜与祭祀」『雲南民族民
俗和宗教調查』二〇一頁、雲南人民出版社

(29) 晚仁・道芬整理一九八四「兩個媳婦」『水族民間故事』二
二九一二四〇頁、上海文芸出版社

(30) 耿予方記録一九八四「神馬平妖」『民間文学』第一期六八
一七〇頁

【付記】本稿は一九八六年六月七日、遠野市で開催された日
本口承文芸学会第十回大会での発表の骨子を改稿したものであ
る。

発表と改稿にあたり、民族学博物館教授の君島久子先生には
懇切なご指導をいただき、筑波大学教授の小澤俊夫先生には有
益なご教授をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表しま
す。

【追記】本稿を提出した後、雲南省徳昂族の「不思議な花樹」、
同省彝族の「阿蘭と阿宝」(共に『山茶』一九八六第五期)と、
貴州省漢族の「金秀と千工堰」『南風』一九八五第四期)に気
づいたが、前二話は第II型の灰かぶり、後者も第II型の変型で